ホウレンソウべと病について

【本ページに関する問い合わせ】川越農林振興センター 農業支援部 技術普及担当　☎049-242-1804

1　ホウレンソウべと病の症状

ホウレンソウべと病は、下葉の表面に境目が不明瞭な黄色い斑点が現れ、次第に拡大しながら淡黄色～淡緑色の不整形な病斑が見られるようになります。また、葉の裏面には、灰色でビロード状のカビが見られるようになります。

さらに、症状が進むと病斑部を中心に葉が奇形となったり、病斑が融合して葉の大部分が変色し次第に枯れてしまいます。

2　べと病の特徴

べと病は、糸状菌（カビ）が原因で発生する病害です。主に被害株や前作の発病残渣（ざんさ）が伝染源となり、気象条件が整うと風などによって菌が飛散し感染・発病します。また、種子に付着した菌によって伝染することでも知られています。

べと病菌には、ホウレンソウの品種に対し病原性の異なる種類（レース）があります。地域で発生しているレースに抵抗性を持つ品種を栽培すると本病には感染しませんが、新しいレースが次々と出現するため、それまで抵抗性を持つと思われていた品種が発病する事例が認められています。

3　発生しやすい条件

べと病菌は、平均気温が8～18℃で伝染しやすくなります。比較的冷涼な春と秋に発生しやすく、とくに降雨や曇天が多いと急激に蔓延します。同様に、冬季のトンネル栽培も湿度が高くなりやすいので、発生が助長されます。

また、密植や多肥栽培等により、軟弱かつ過繁茂（かはんも）な生育で発病が多くなります。

4　防除時期と防除方法

べと病は発生後では防除が難しいので、耕種的な防除対策を徹底するとともに、予防的に薬剤防除を行います。もし、発病が見られた場合には、発生初期に薬剤による防除を徹底します。

(1)　耕種的防除

ア　発生圃場（ほじょう）では、収穫残渣を圃場外に持ち出し処分します。

イ　品種選定は、レース抵抗性に留意しましょう。

ウ　多湿条件を回避するため、マルチ栽培を行います。また、トンネル栽培では湿度を下げるため、換気を心掛けましょう。

エ　軟弱かつ過繁茂な生育にならないよう、厚播きや多肥栽培を避けましょう。

オ　発病が見られたら、直ちに発病株を抜き取り処分します。

(2)　薬剤防除

登録薬剤を播種時に土壌施用するか、発生前から発生初期に茎葉に散布します。防除にあたっては、葉の裏面にも十分に薬剤がかかるように、規定量を散布しましょう。

ア　播種時の防除…べと病菌は土壌中で長く生存するので、どの圃場でも発生する可能性があります。播種時にはユニフォーム粒剤を規定量（9キログラム／10アール）施用し、生育初期の発生を抑えましょう。

イ　発芽後からの薬剤散布…農薬の効果が継続するよう定期的に防除するとともに、耐性菌出現の対策としてローテーション散布を行いましょう。

※農薬を使用する際は、必ずラベルを確認しましょう。また、使用履歴を記録しましょう。

ホウレンソウべと病農薬例（令和３年８月31日現在）

農薬の名称	使用時期（収穫前日数）	希釈倍率	使用回数	FRACコード
ライメイフロアブル	7日	2,000～4,000倍	2回以内	21
ランマンフロアブル	3日	2,000倍	3回以内	21
レーバスフロアブル	3日	2,000倍	2回以内	40
フェスティバル水和剤	前日	2,000倍	3回以内	40
ピシロックフロアブル	前日	1,000倍	2回以内	U17